

## 中島敦と南洋行

### 南洋物の多様性を中心に

肖 航

#### 要 旨

昭和十六年（一九四一）夏天到十七年春天、中島敦作为南洋国语编修书记在密克罗尼西亚度过了大约八个月的时间。回国后，以自己在南洋的亲身经历及从在当地结识的民族学家土方久功那里得来的资料为题材，创作了作品集《南島譚》和《環礁》。这两部作品集，与作者以往的《过去帳》、《古譚》等作品集所有作品均具有一定的相同特性的特点不同，九篇作品有很多不同之处。

通过对这九篇作品选材以及内涵的多样性进行分析，笔者认为，这九篇作品可以作为中島敦南洋之旅以前的作品的集大成，并为他去世之前写成的代表作《李陵》、《名人传》等找到了作品应该面向的方向，南洋之行虽然短暂，可是对中島の文学作品来说，却是具有着决定性意义的旅程。

キーワード……南洋行 多様性 違和感 狼疾 不可解

#### はじめに

中島敦は南洋統治領の日本語教科書編纂の任を負い、昭和十六年夏から翌春までの約八ヶ月間、南洋庁官吏としてミクロネシアに滞在した。帰京後現地で収集した資料と体験に基づき、「幸福」、「夫婦」、「鶏」の三篇を収める「南島譚」と「寂しい島」、「夾竹桃の家の女」、「ナポレオン」、「真昼」、「マリヤン」、「風物抄」の六篇を収める「環礁 ミクロネシア巡島記抄」と題する作品群を創作した<sup>1)</sup>。南洋物と言われるこれらの作品は中島の文学においてあまり重要視されていない。確かに、南洋での経験をもとに、昭和十七年の夏、つまり、「弟子」、「名人伝」、「古俗」、「李陵」といった代表作の間に挟まるように書かれた「南島譚」と「環礁」は、これらの代表作に比べると、随分と影が薄い。中島自身もこれらの作品についての評価は低いようであった。昭和十七年八月の文学界の編集者庄野誠一宛の手紙には、「南島譚」の三篇について、以下のように書かれている。

先日お送り申し上げました原稿の下書きを昨日読み返して見ました所余りの酷さに我乍らいやになつてしまいました。殊に二番目の「夫婦」と題するものなど、全く冷汗が出ます。どうしてあんなものをお送りしたものが、さぞ御迷惑なすつたことと存じます<sup>2)</sup>。

中島の或る程度の謙遜の気持ちもあるが、「南島譚」、特に「夫婦」に対する作者の否定的な評価が示されている。

しかし、南洋行は中島の生活上の大きな出来事であり、「南島譚」と「環礁」の二つの作品群は数も量も彼が残した作品群の中で大きな割合を占める。そのような意味では、南洋行は決して無意味な旅ではなく、中島の文学世界にとっても重要な位置を占めていたはずである。南洋物は、彼の心理的・精神的な葛藤・変化の様子を反映している。

周知のように、「南島譚」と「環礁」の九つの作品は、それぞれ性質が異なる。「南島譚」の三篇は、パラオで知り合った画家・彫刻家で民族学者の土方久功の資料に立脚し、「古譚」の風格を受け継いでいると言えるが、物語りの年代、背景、人物はかなり異なる。それに対して、「環礁」の六篇は、中島自身の現地での経験をもとにして創作したルポルタージュ風作品であるが、「ナポレオン」は土方の資料をも参考に行っている。「真昼」、「寂しい島」は彼の南洋にいる時の心象風景をも反映している。このような作品の多様性は、勿論、「南島譚」も「環礁」も南洋現地ではなく、東京に戻った昭和十七年の夏に書かれたことに関わるが、中島の精神内面の動き、そして自分の今まで歩んできた文学の道のりに対する思考・反省によるものではないかと思う。

本稿では、南洋物の多様性を分析することを通じて、これらの作品はどのように彼の精神の内面の動き、及び彼自身の文学に対する思考・反省を反映しているのかを考察する。そして、南洋行

は、中島にどのような影響を与えたのかをも明らかにしたい。

まずは、中島自身の現地での経験をもとにして、創作した作品、及び自身の現地経験を生かした各部分について考察する。

### 一 植民地南洋に対する違和感

南洋物の中では、中島自身の現地での経験をもとにして創作した作品には、「マリヤン」、「風物抄」などがある。さらに、土方の資料をもとにした作品の中にも、中島自身の現地経験を生かした部分も多い。南洋と南洋人に対して、彼の最も関心を持つところを、これらの部分から見つけることができるであろう。中島はどの角度から南洋と南洋人を見つめていたのであろうか。そして彼の目に映る当時の植民地としての南洋群島の社会的現実、またその社会に生きる南洋島民の暮らしは一体どのようなものであつたらうか。

#### 1 「マリヤン」に見られる南洋と南洋人の現実

作品「マリヤン」は、中島自身の現地での経験をもとにして創作した作品である。中島は画家・彫刻家で民族学者の土方久功との南洋での付き合いの中で、現地の様々な人々と出会った。「マリヤン」に登場する主人公のマリヤンのモデルになった「マリヤ」もこのような人の一人である。中島の日記には、この実在の「マリヤ」に関する記述は二箇所しかない。

夕方、土方氏宅にて島民料理を喰ふ。(中略)食後、島民の唄(日本語と土語と交れるもの)を皆で唱ふ。今日の料理はマリヤのご馳走なり<sup>3</sup>。

夜土方氏方に到り、阿刀田氏高松氏等と飲み喰い語る。一時、外に出で一同マリヤを誘出し、月明に乘じコロール波止場に散歩す、プール際にて小憩。帰途初詣の人に会うこと多し、疲れて帰る<sup>4</sup>。

この二箇所の日記は、ただ「マリヤ」の名前が出ていただけで、彼女の容貌、性格、実際の生活ぶりが全く示されていない

作品「マリヤン」については、岡谷公二によって、次のような見解が示されてきた。

「マリヤン」には、ほとんど虚構はない模様で、久功が彼女にパラオ語を習っていたのは、その日記からも明らかである。(中略)僅々十ページに満たないこの短篇には、何の物語もないし、事件も起きない。単なるスケッチにすぎないのだが、ここに描き出されているマリヤンの姿は実に鮮やかで、魅力がある<sup>5</sup>。

確かに中島は、「マリヤン」執筆にあたり、実在の「マリヤ」を

マリヤンのモデルとし、土方を「土俗学者H氏」のモデルとして  
いることは間違いないであろう。しかし、日記のただ二箇所の記  
述を根拠に、作品「マリヤン」に描かれたマリヤン像をそのまま  
中島がコロールで実際に出会ったマリヤ本人と同定することは困難  
であろう。マリヤン像は、中島敦の創意によって、改められている  
可能性も十分にある。

まずは、南洋行以前の作品における中島の南洋島民像はどのよ  
うなものであったのであろうか。昭和十四年に完成したとされる  
作品「狼疾記」には、主人公の三造は南洋人の生活に関する記録  
映画を見ている場面がある。スクリンの上に流されている映像は  
以下のものである。

眼の細い・唇の厚い・鼻のつぶれた土人の女達が、腰に一寸  
布片を捲いただけで、乳房をぶら／＼させながら、前に置い  
た皿のやうなものの中から、何か頻りにつまんで喰べてゐる。  
米の飯らしい。

そして、三造は映画を見ながら、次のように考え始めた。

其の頃三造は斯ういふものを 原始的な蠻人の生活の記録  
を讀んだり、其の寫眞を見たりする度に、自分も彼等の一人  
として生まれてくることはできなかつたものだらうかと考え  
たものであつた。(中略)確かに自分も彼等蠻人共の一人とし

て生まれて来ることもできた筈ではないのか？そして輝かしい熱帯の太陽の下に、唯物論も維摩居士も無上命法も、乃至は人類の歴史も、太陽系の構造も、すべてを知らないで一生を終えることも出来た筈ではないか？（6）

この部分で分るように、主人公三造の南洋島民に対するイメージは、彼らが「原始的な蠻人」であり、「輝かしい熱帯の太陽の下に」「すべてを知らないで一生を終えることも出来た筈」という表現に象徴されたものである。三造のこの南洋島民に対するイメージは当時の作者中島の南洋島民に対するイメージをも現しているといえよう。しかし作品「マリヤン」の中のマリヤンはこのような「狼疾記」に描かれた南洋島民のイメージとは、全く性質が違

う。マリヤンは「パラオでは相当に名の聞えたインテリ混血児（英人と土民との）」を養父に持ち、その人物がかつてドイツ領時代に英語の通訳として活躍していた。マリヤン本人は内地の女学校に二三年いたこともあり、日本語も英語も堪能な人物として描かれている。

「マリヤン」という言葉の響きは、一見、西洋女性を想起させる。しかしながら、彼女は予想に反して、正真正銘のカナカ人であった。さらに、作中の「私」は彼女の部屋で厨川白村の「英詩選釈」と岩波文庫の「ロテイの結婚」を見つけ、次のように述べている。

さういふ雰圍気の中で、厨川白村やピエル・ロテイを見つけたときは、實際、何だかへんな気がした、少々いたましい気がしたといつてもいい位である。尤も、それは、その書物に對して、いたましく感じたのか、それともマリヤンに對していた／＼しく感じたのか、其處迄はハツキリ判らないのだが（7）

ここで、「私」が発見した「いたましさ」という感情は、コロールの街からも感じていた。

實際、このコロールといふ街　其處に私は一番永く滞在してゐた譯だが　には、熱帯でありながら温帯の價值標準が巾をきかせてゐる所から生ずる一種の混亂があるやうに思はれた。（中略）熱帯的な美を有つ筈のものも此處では温帯文明的な去勢を受けて萎びてゐるし、温帯的な美を有つべき筈のものも熱帯的風土自然（殊に其の陽光の強さ）の下に、不均合な弱々しさを呈するに過ぎない。此の街にあるものは、唯、如何にも植民地の場末と云つた感じの・頹廢した・それである、妙に虚勢を張つた所の目立つ・貧しさばかりである（8）。

ここで中島は「植民地の場末」といふ言い方を使っている。確かに、南洋群島は十七世紀スペインの航海者たちに発見され、そ

の後、ドイツの領有を経て、大正三年十月の日本海軍による占領の後、大正八年六月に調印されたヴェルサイユ講和条約により日本の委任統治領となっていた。松下博文は「マリヤン」を次のように捉えている。

中島には、マリヤンの土俗的な風貌に、聖なる「土人」の系譜を見る反面、その周辺に置かれた文庫やハイヒールや、洋傘に、また、彼女がしゃべる英語や日本語に、「集積された植民地の実体」を見る思いがあつたのではないか<sup>(9)</sup>。

松下に指摘されるように、中島は国語編修書記として島々の学校を視察する中で、こうした南洋群島の重層する植民地統治の跡に触れたことから生じた「いたましい」実感を抱いていたようである。そして、このスペイン、ドイツ、日本の統治を受けてきた南洋群島の風景の中に、中島は強い違和感を見出した。このような強烈な違和感が、「マリヤン」以外の南洋物にも所々現れている。特に、作中の中島自身の現地での経験をもとにして創作した部分には、この特徴が最もはつきり現れていると考えられる。例えば、それは「風物抄」にも見られる。ヤルト島に行き、当地の大酋長カプアの家を訪れる時のことである。

瀟洒たるバンガロー風の家だ。入口に、八島嘉坊と漢字で書いた表札が掛かつてゐて、ヤシマカプアと振り仮名が附け

てある。(中略)初め主人が不在とて、若い女が二人出て来て接待した。一見日本人との混血と分る顔立だが、二人とも内地人の標準から見ても確かに美人である。二人が姉妹だということも直ぐに判つた。姉の方がカプアの細君なのだといふ<sup>(10)</sup>。

漢字社会には遥かに遠い南洋であるのに、名前を「八島嘉坊」と書き、「ヤシマカプア」と称する島の大酋長がいる。しかもその大酋長は日本人との混血の妻を持っている。統治者である日本人との混血の妻を持つてることが、統治国の人との混血が現地人より高貴であると大酋長は考えているであろう。この大酋長は中島にとつて、長い植民地統治の下に生きる哀れな南洋人を代表するといえよう。

## 2 植民地の現実に向ける中島の目

植民地南洋の様々な不調和を目にし、違和感を感じた中島は、日本の植民地支配に対して、批判的だったと思われる。「土民教育」と称して重労働に従事させている日本の植民地政策の実態が中島の目に映つたその時点で、彼は日本語教育の無意味さと、植民地南洋の現実をはつきりと把握できたといえよう。パラオに到着した後、父と妻にあてた次の二通の書簡はそれをはつきりと物語っている。

教科書編纂者としての収穫が頗る乏しかったことは、残念に思つてをります。現下の時局では、土民教育など殆ど問題にされてをらず、土民は労働者として、使いつぶして差支えなしというのが爲政者の方針らしく見えます。之で、今迄多少は持つてゐた・この仕事への熱意も、すつかり失せ果てました<sup>11</sup>。

同じようなことを三日後妻にも書き送っている。

土人の教科書編纂といふ仕事の、無意味さがはつきり判つて来た。土人を幸せにしてやるためには、もつとく大事なこととが澤山ある。(中略)なまじつか教育をほどこすことが土人たちに不幸にするかも知れないんだ。オレはもう、すつかり、編纂の仕事に熱が持てなくなつて了つた。(中略)昔は、彼等も幸福だつたらうがねえ。(中略)今は一日中こき使はれて、おまけに椰子もパンの木も、ドンく伐られてしまふ。全く可哀さうなものさ<sup>12</sup>。

このような日本の殖民地政策に対する中島の批判的な見方は決して軽視することが出来ないと思う。なぜかという、南洋に限らず、中島の作品の中には殖民地の空間を舞台として執筆されたものが少なくないからである。例えば、一高時代の習作「巡查の居る風景」、「D市七月叙景」、前期作品の「虎狩」、未完成の長篇

「北方行」などがある。川村湊はこのような中島の作品について「当時の日本の植民地を含めた版図の北と南を包括する作品世界の広さを持つていたといつてよい」と述べている<sup>13</sup>。実際に中島は父親の転勤で朝鮮京城で少年期を過ごし、中国の大連や上海にも滞在したことがある。

知られるように、中島が少年時代を過ごしていた朝鮮での体験が習作「巡查の居る風景」に鮮烈に投影されている。そして、短い南洋の旅であつたが、帰国後、彼は、熱帯の南洋で西洋風の名前をする厨川白村の「英詩選釈」と岩波文庫の「ロテイの結婚」を読む生粋のカナカ女性物語を作り上げた。南洋物を創作するに当たつて、植民地南洋と南洋人が頭に浮かぶ時、彼の植民地で過ごした少年時代の記憶が呼び起こされたのではなからうか。それによつて、「マリヤン」等の作品は、少年時代の植民地体験を生かした習作「巡查の居る風景」などの前期作品の性質に近いのではないかと考えられる。

## 一一 「狼疾」の南洋

中島敦の作品が評価される時、「狼疾」という言葉はよく使われている。作品「狼疾記」の冒頭に、「養其一指、而失其肩背、而不知也、則爲狼疾人也」という『孟子』・告子上の言葉が引用されている。一つの指を大切にすあまり、肩と背中までを失つてしまふという意味である。「狼疾記」の主人公三造は中島とはほぼ等身

大であり、彼にとつての「狼疾」は「過剰な自己分析」であり、「存在の不確かさ」という、存在に対する懐疑である。三造は、南洋島民に関する記録映画を見ているうちに、どうして自分は彼らと同じ世界に生まれなかつたのかと疑問を感じる。自分が現在いる世界の必然性が疑わしくなる。このような懐疑は中島の前期作品「かめれおん日記」と「北方行」などにも見られる。

南洋物の中では、「環礁」の「真昼」と「寂しい島」を注目してみれば、この二つの作品には、前期作品に見られる「過剰な自己分析」、「存在の不確かさ」という「狼疾」の特徴が含まれていることが明らかになるであろう。しかし、彼の書簡と日記によると、中島の南洋行はある意味で、「狼疾」から脱却しようという目的もあると考えられる。では、南洋から帰国した後の中島はどのような心境で、この二つの作品を創作したのであろう。

中島の南洋行の動機については、佐々木充は、「我々の魂の故郷」である南洋といった「遙かな国・遠い昔への思い、異世界への憧憬という形をとった、基本的な人間存在の認識への希い」があると指摘している<sup>14</sup>。しかし、中島の南洋行は決して、このような抽象的なものだけではない。

まずは南洋に出かける前の、これから行く南洋に、中島が求めていたものは何であろう。中島の理想の南洋生活のイメージはどのようなものであつたかについて考察してみる。

### 1 中島敦の理想の南洋行

勝又浩は、中島敦の南洋行決意を次の三つの理由から捉えている<sup>15</sup>。第一は、「転職」の希望であり、第二は、熱帯の南洋で持病の喘息のための「療養」の願い、第三は、「生来のエキゾティシズムから来る憧れ」である。日記と書簡などの資料によると、確かに四一年三月、横浜高等女学校を休職した時の中島は、教師から文学者への転身を図るべく己れを試してみたいとの気持ちがあつた。また、絶えず悪化する喘息を治療したいとの願いもある。さらに、南洋に行く前に書いた作品「光と風と夢」の中で、彼は主人公ステイヴンスンの口を借りて、「太陽と大地と生物とを愛し、富を軽蔑し、乞ふものには與え、白人文明を以て一の大偏見と見做し、教育なき・力溢れる人々と共に濶歩し、明るい風と光との中で、労働に汗ばんだ皮膚の下に血液の循環を快く感じ、人に嗤はれまいとの懸念を忘れて、眞に思ふ事のみを言ひ、眞に欲する事のみを行ふ<sup>16</sup>。」との信条を述べ、彼のイメージ上のユーロピア的な南洋生活への憧れを明らかにしている。

南洋に到着してから、たか夫人にあてた昭和十六年十月一日付の書簡には、「僕は今迄の島でヤルトが一番好きだ。一番開けてゐないで、ステイヴンスンの南洋に近いからだ<sup>17</sup>。」と記されていることから明らかなように、もともと中島には、かつて自分が「光と風と夢」の中で描いたステイヴンスンの南洋行を強く意識し、ステイヴンスンが経験した南洋に出会うことを心から臨んでいた。

また、島尾敏雄は、中島の南洋行の理由について次のように述べている。

中島敦が南島に関心を寄せたことは、ただの気まぐれとは思えない。彼が小笠原島に旅行し、ポリネシアに於けるステイヴンソンをテーマにした「光と風と夢」を書き、遂にはバラオ島の南洋庁に就職したことの根には、同じ理由の潜んでいたことはまちがいないだろう。（中略）それはたぶん彼が自ら「狼疾」と呼んでいたところの知識人的近代意識を、「南方の至福」の地で癒そうと考へてのことだったはずだし、その上「新しい未知の環境の中に己を投出して、己の中にあつて未だ己の知らないでゐる力を存分に試み」（「真昼」）ようにしたふしさえも見受けられるように思える。<sup>18</sup>

この島尾の論のように、中島は南洋で「過去帳」や「北方行」に見られる彼の文学の根底にある「狼疾」から脱出し、自分の未知の力を試し、人間としての新生を図つたのではなからうか。

しかし、中島の南洋体験は当初考へていたほど甘いものではなかつたようである。「環礁」の中の「真昼」と「寂しい島」の心理描写から、当時の中島の心境の推移が窺える。

## 2 「真昼」と「寂しい島」に見られる中島敦の南洋行の現実

すでに多くの指摘があるように、「真昼」は、「南洋における中島敦の心象風景を知る上で重要な文章」<sup>19</sup>である。以前の作品によく見られた両分身によるダイアローグによつて、自らを省みする方法で書かれている。

作品「真昼」では、ミクロネシア諸島の遍歴中に立ち寄つた小島で、珊瑚の浜辺の木陰で昼寝から目覚めた「私」は、快く伸びをした後、この島の語彙に「時間」という言葉があるかと疑うほど一様な時の流れの中で、考へ始める。

自分が旅立つ前に期待していた南方の至福とは、これなのだらうか？この晝寝の目醒めの快さ、珊瑚屑の上での靜かな忘却と無為と休息となのだらうか？

「いや」とハツキリそれを否定するものが私の中にある。「いや、さうではない。お前が南方に期待してゐたものは、斯んな無為と倦怠とはなかつた筈だ。それは、新しい未知の環境の中に己を投出して、己の中にあつてまだ己の知らないでゐる力を存分に試みることだつたのではないのか。更に又、近く来るべき戦争に当然戦場として選ばれるだらうことを豫想しての冒険への期待だつたのではないか。」

さうだ。たしかに。それなのに、其の新しい・きびしいものへの翹望は、何時か快い海軟風の中へと融け去つて、今は



唯夢のやうな安逸と怠惰とだけが、懶く怡しく何の悔もなく、私を取り圍んでゐる。

「何の悔いも無く？果して、本當に、さうか？」と、又先刻の私の中の意地の悪い奴が聞く。「怠惰でも無爲でも構はない。本當にお前が何の悔も無くあるならば。人工的・歐羅巴の・近代の・亡靈から完全に解放されてゐるならばだ。所が、實際は、何時何處にいたつてお前はお前なのだ。銀杏の葉の散る神宮外苑をうそ寒く歩いてゐた時も、島民共と石焼きのパンの實にむしやぶりついてゐる時も、お前は何時もお前だ。少しも變りはせぬ。ただ、陽光と熱風とが一時的な厚い面被を一寸お前の意識の上にかぶせてゐるだけだ。お前は今、輝く海と空とを眺めてゐると思つてゐる。或ひは島民と同じ目で眺めてゐると自惚れてゐるのかも知れぬ。とんでもない。お前は實は、海も空も見てをりはせぬのだ。ただ空間の彼方に目を向けながら心の中で Elle est retrouvée! Quoi? [l'Eternité C'est lamer mêlée au soleil. (見付かつたぞ！何が？永遠が。陽と溶け合つた海原が)と呪文のやうに繰り返してゐるだけなのだ。お前は島民をも見てをりはせぬ。ゴーガンの複製をみてをるだけだ。ミクロナシアをみてをるのでもない。ロティとメルヴィルの畫いたポリネシアの色褪せた再現を見てをるに過ぎぬのだ。そんな蒼ざめた殻をくつつけてゐる目で、何が永遠だ。哀れな奴め(20)！」

このような両分身による内面的な問答がまだしばらく続くが、中島はこれを通じて、何を言おうとしているかはもう十分に明瞭であろう。「夢のやうな安逸と怠惰」の中で、「新しい未知の環境の中に己を投出して、己の中にあつてまだ己の知らないである力を存分に試み」ようという彼の願望は、南洋で幻滅していくということである。中島にとって、自分の未知の能力を見出そうとする南洋行であつたが、結局あまり変わりばえのしない自分を見出してしまふ。

この部分を「狼疾記」の表現に比べてみよう。

三造の中にある貧弱な常識家が、彼自身の斯うした馬鹿々々しい非常識を晒ひ、警めてゐる。「冗談じゃない。いい年をして、まだそんな下らないことを考えてゐるのか。もつと重大な、もつと直接的な問題が澤山あるぢやないか。何といふ非現実的な・取るに足らぬ贅澤な愚かさだに耽つてゐるのだ。(中略)」「本當に人々は最早この問題を卒業してゐるのだらうか？」と彼の中にゐる、もつ一人が反問する(21)。

まだまだ続くが、この部分は引用の「真昼」と同じく、「三造」の中にいる両分身による問答の形で展開されている。内容的にも、「真昼」のような内面的な自己認識に関するものである。

さらに南洋にいる間の書簡にも、度々痛ましい自省的な内容が見られる。例えば、昭和十六年九月十七日付のたか夫人宛の書簡

には、自分を深く反省し、責める内容が書かれてある。

今年の七月以来、おれはオレでなくなつた。本当にそんなだよ。昔のオレとは、まるで違ふ、へんなものになつちまつた。昔の誇も自尊心も、昔の喜びも、おしやべりも、滑稽さも、笑ひも、今迄勉強してきた色々な修業も、みんなみんな失くして了つたんだ。ホントにオレはオレでない。お前たちの良く知つてゐる中島敦ぢやない。へんな、オカシナ、何時も沈んだ、イヤな野郎になり果てた。<sup>22</sup>

着任後半年で内地への転勤希望を出した中島が、南洋にいる自分に、失望の気持を表したのは最初の旅行を終えた十一月の初めだった。その頃の手紙に、「十月の終になつても、一枚も書けなかつた時は、さすがになさけなかつたなあ！」<sup>(23)</sup>と書いている。健康状態の悪化、国語教科書編纂の仕事の無意味さ、役所での人間関係の煩わしさ、彼を取り巻く事情は、彼の南洋行が、当初、彼の目的を果たし得なかつたことを証している。

「環礁」のもつ一つの作品「寂しい島」も、「狼疾記」などに見られる「存在の不確かさ」に関わる表現がみられる。

五歳になる女兒を除いて、二十歳以下の者は誰一人いない、恐らく近い将来、人々が死絶えるであろう寂しい島を離れる夜、「私」は、船の上で南国の美しい星座を見上げつつ、想いは、この島から宇宙の様子へとんでいく。

先刻夕方の濱邊で島民共の死絶えた後の此の島を思ひ畫いたやうに、今、私は、人類の絶えて了つたあとの・誰も見る者も無い・暗い天体の整然たる運転を　ピタゴラスの言ふ・巨大な音響を發しつゝ輪廻する無数の球體共の様子を想像して見た。

何か、荒々しい悲しみに似たものが、ふつと、心の底から湧上つて来るやうであつた。<sup>24</sup>

右の部分に示されているのは、「人間を超えたものの存在、その支配下における人間存在のはかなさ、非力、それへの憤り等々」<sup>(25)</sup>であり、中島の「狼疾」の代表的な表現「存在の不確かさ」である。

中島は、自身が考えていた南洋行の目的を達成できなかった。それによつて、「狼疾」を起こした。「過剰な自己分析」、「存在の不確かさ」に代表される中島の「狼疾」は、作品「真昼」と「寂しい島」に深く潜んでいる本質的なものである。この二つの作品は、自己反省、存在への懐疑を描いた「過去帳」の性質に近いといえよう。

### 三 不可解な南洋と南洋人

「南島譚」と「環礁」の中には、「不可解さ」が繰り返し表現さ

れている。特に「南島譚」は「譚」的要素を生かし、不思議な南洋風景と南洋人の様子を現している。

同じ「南島譚」の中でも、作品によりその性質は異なっている。

「幸福」は、中国古典『列子』の話を素材にしたと言われ、同時に執筆された中国ものにつながる作品と見なし得る。「夫婦」は、ギラ・コシサンと妻エビル、そして彼の愛人リメイに関する不思議な恋愛譚である。南洋の独特な風俗、人情も描かれている。「鶏」は現地知り合った土方久功の資料に立脚した作品であり、同時代の南洋の人間の行動の不可解性を表現する作品である。

「南島譚」の三つの作品の中には、「不可解」が繰り返し表現されている。「幸福」は「夢」という非現実なものによる、現実の状況の不可解な転換を描いている。「夫婦」は、淫奔な妻と貞淑な娼婦という女性の不可解なものに直面する男の話が描かれている。「鶏」は南洋の一老人の不可解な行動に心を悩ます「私」が描かれている。つまりどの作品も、明快な熱帯風光の南洋ではなく、代わりに遠い昔の南洋、不思議な南洋の慣習、不可解な南洋の人間などが描かれている。

### 1 「幸福」の中の現実と夢の倒錯

作品「幸福」には、夢と現実が交替するという不可解な物語りが展開されている。こちらの現実には、あちらの夢に過ぎないであるが、それぞれの夢と現実には等価に置かれず、夢のほうには、より強い現実性がある。つまり、物語の中の夢は現実に対して、優

位にある。

作品の冒頭から、さっそく我々の常識に反する不可解な世界が描かれている。

昔、此の島に一人の極めて哀れな男がゐた。年齢を数へるといふ不自然な習慣が此の邊には無いので、幾歳といふことはハツキリ言へないが、餘り若くないことだけは確かであった。髪の毛が余り縮れてもをらず、鼻の頭がすっかり潰れてもをらぬので、此の男の醜貌は衆人の鬻笑の的となつてゐた。おまけに肩が薄く、顔色にも見事な黒檀の様な艶が無いことは、此の男の醜さを一層甚だしいものにしてゐた<sup>26</sup>。

この作品の一般の読者にとっては、年を数えることは自然の習慣で通常のことであるが、語り手はこれを「不自然な習慣」と述べる。さらに、この南洋の島の人々は髪が縮れており、鼻も潰れていて、唇も厚く、色も黒いことで人間の美しさを示している。つまり、習慣と美意識が我々とは全く異なつた世界であり、中島は一つの認識の転倒を描いている。

下僕は、囚人である長老にこき使われているがゆえに、ある時タロ芋を供え、「椰子蟹力タツツと蚯蚓ウラズの祠」で、自分の苦しみをいくらか軽減して欲しいと神に祈る。

此の二神は共に有力な悪神として聞こえてゐる。パラオの

神々の間では、善神は供物を供へられることが殆ど無い。御機嫌をとらずとも祟をしないことが分かっているから。之に反して、悪神は常に鄭重に祭られ多くの食物を供へられる。海嘯や暴風や流行病は皆悪神の怒から生ずるからである。さて、力ある悪神・椰子蟹と蚯蚓とが哀れな男の祈願を聞入れたのかどうか、とにかくそれから暫くして、或晩この男は妙な夢を見た。

其の夢の中で、哀れな下僕は何時の間にか長老ルバットになつてゐた<sup>(27)</sup>。

そして、次の夜、次の次の夜も、夢の中で彼は又長老になつた。下僕はだんだん、夢の中で自分が長老であることを確信し始めた。その結果、「近頃めつきり肥つて来た。顔色もすつかり良くなり、空咳も何時かしなくなつた。見るからに生き／＼と若返」ることになつた。ここに至つては、夢はもう夢ではなくなり、現実以上に現実になつたといえよう。小説の中は下男が夢の世界の栄養で健康になり、長老が夢の世界の重い労働で不健康になつた。つまり、物語の中では、不思議に夢の世界の方が人間の人生を豊かにし、満足を大きくする。物語の中の夢は現実に対して、優位にある。「この男は、夢が昼の世界よりも一層現実であることを既に確信してゐるのであらう。アアと心からの溜息を吐きながら、哀れな富める主人は貧しく賢い下僕の顔を嫉ましげに眺めた」という文をもつて物語は閉じられる。

## 2 不可解な「夫婦」の世界

作品「夫婦」には、いくつかの不可解な南洋の独特な慣習が描かれている。主に、「ヘルリス」(痴情に絡む女同士の喧嘩)、「モゴル」(未婚女性の男性への奉仕)、「ムル」(夫婦固めの式)がある。これらの不可解な慣習は物語りの大きな支えとなる。中島にとって、このような南洋の慣習は不思議で、別世界のことである。

作品をより南洋らしく仕上げるために、そして物語の「不可解さ」を一層引き出すために、南洋の慣習は不可欠な要素だと言えよう。

さらに、三人の登場人物に対する描写は作品を不可解な色彩を持つ物語りに仕上げた。一般常識では、妻は貞淑であり、娼婦はみだらな性質を持つはずである。作者は「夫婦」の中では、倒錯の形で淫奔な妻と貞淑な娼婦の愛に対する態度の対照、立場と行為のズレを強調した。

ギラ・コシサンはリメイとの初対面の時に、「この女によつてのみ自分は現在の女房の圧制から免れられるかもしれぬ」との「運命的な予感」を持つ。そして、リメイは「情熱的な凝視」によつて報い、このように複雑で、繊細なものと描かれる恋は気の弱い男ギラ・コシサンとモゴル一番の美人リメイの間に簡単に成立する。物語の不可解さが強調されている。

また、随所見られるユーモラスな表現が一層、「夫婦」の「不可解さ」を引き立てる。夫ギラ・コシサンの臆病な行動の描写と、妻エビルの大袈裟な行動やセリフの描写はユーモアを生ずる。物

語の最後の部分が物語のクライマックスであり、一番滑稽さに溢れる。ギラ・コシサンとリメイは島から逃げ出して、結婚する。しかも盛大な「ムル」をあげる。後でこのことを知ったエビルは大いに暴れて、大椰子樹に登り、ギラ・コシサンとリメイを呪ったが、誰も相手にしてくれず、エビルの期待はずっかり外れる。しかし、ここでエビルの新しい恋が始まる。鼻が半分落ちかかった村の物持ちの男と意気投合し、手を繋いで立ち去る。そして

斯くてギラ・コシサンとその妻のエビルとは二人とも、但しめいく別々にはあるが、幸福な後半生を送つたと、今に至る迄村人達は語り傳へてゐる。(28)。

見た目が童話作品の終わりの部分のようなこの一文は、我々どのような暗示を与えようとしているのか。ギラ・コシサンもエビルもいずれ幸せになれたが、「めいめい別々にはあるが」と作者が強調しているように、これはある夫婦関係の崩壊によるものである。夫婦関係の崩壊が幸福をもたらすという逆説性が強調され、作品の「不可解さ」は終始一貫となる。

### 3 「鶏」の三羽の鶏の真意

作品「雞」は、中島敦が南洋で知り合った土方久功が記した日記(29)の内容を素材に書かれた作品である。「今は世に無きオルワングル島の昔話」という「幸福」、パラオ本島に伝わる「ギラ・コ

シサンとその妻エビルの話」という「夫婦」と違い、「雞」は「私」が南洋での体験を直接語る形式をとった作品である。作品の不可解さは主に「三羽の鶏」をめぐる展開される。

土方の日記には、南洋島民の老人ギラメスブツ爺さんが土方に鶏を贈るよう遺言を残し、亡くなったエピソードのみが書かれ、「そんなにも優しい心と、そんなにも残忍な行為とが、どこかで摺れ合うことがなくて済むものだろうか」と不思議に感じる。引用の中で土方が言う「残忍な行為」は、戦争に参加し、死人の首を得てはブラバオル首踊りを踊って村々をまわる「首狩」という当地の慣習である。つまり、土方が感じた不思議さは優しさと残忍さが一人の人間の上に現れることから来たものである。しかし、その「首狩」はギラメスブツ爺さん一人だけの行為ではなく、その民族全体で行う一種の慣習であり、ギラメスブツ爺さんはその民族の一員として参加する義務があるといえよう。つまり、ギラメスブツ爺さん自身の「残忍な行為」というより、南洋の慣習である「首狩」自体の残酷性を土方は認識したのではないかと思う。しかも、日記の最初のところで、この老人は「その恐ろしい顔とは似てもつかない優しい心を持った爺さん」であることが強調されている。作者が日記の中で表現したかったのは、彼の感じた不思議さよりも、老人の純粹な感謝の気持ちへの感動ではないかと思われる。

それに対して、中島敦の作品「雞」は、南洋島民が「私」にとっては「不可解」であることを中心にまとめられた作品である。

作品の中で、繰り返し我々に南洋島民が「不可解」であることが示されている。例えば、

南海に来た最初の年よりも三年目の方が、三年目よりも五年目の方が、土人の氣持は私にとつて一層不可解になつて来た  
（30）。

南海の人間はまだく私などにはどれ程も分かつてゐないのだといふ感を一入深くしたことであつた（31）。

と「不可解さ」を強調している。そして、この「不可解さ」が一人の老人マルクープの上に集中的に表現される。

彼の誤魔化しに対して酷く腹を立てた「私」に怒鳴られた老人は「石の様な無表情さになり、凡ての感覚に蓋をした・外界との完全な絶縁状態に陥」つたことがある。このことに対して、私は「不可解」を感じ、

暫くして話に漸く油が乗つてきたと思はれる頃、突然、全く突然、老爺は口を嚙む。初め、私は先方が疲れて一息入れてゐるものと考え、静かに相手の答えを待つ。しかし、老爺は最早語らぬ。語らぬばかりではない。いま迄にこやかだつた顔付は急に索然たるものとなり、其の目も今は私の存在を認めぬものの如くである（32）。

そして、二人の関係は壊れ、老人は去る。同時に私の大事な懐中時計もなくなる。疑念はマルクープにかけられたまま、二人の関係は途切れる。後に瀕死の状態にある老人に「私」は再会し、老人に医師を世話する。老人は深く謝意を抱くが、そのまま世を去つた。

老人の死後、三羽の鶏が別々の男によつて日を違えて私の元に届けられる。マルクープからの生前の礼だという。不思議に思つたのは、何故マルクープは島では大変貴重な鶏を遺言として三人の異なる男に託したか、という点である。「約束を守らない」人が島民にいるからだ、と分かる。しかし、そこまでせねばならない程の謝意を老人は抱いていただろうか。最大の不思議は、理由もなく会話を閉ざしてしまつた老人、狡猾な笑みを浮かべ値段の交渉をする、計算高い老人が、死に及んで、「私」に可能な限りの謝意を伝えようとするのは何故かということである。中島は老人が鶏を贈つたことを「優しい心」とみなしたり、「首狩」の慣習を「残忍な行為」と見なす判定を行わない。ただ「私の心象に残された彼の好悪さ」という表現は、中島が南洋人に感じた「不可解さ」を強く表現している。

マルクープ老人に代表される南洋の人間の「不可解さ」は中島の目に映つた「南洋像」の一つではないかと思う。

「南島譚」の三つの作品の中には、「不可解さ」が繰り返し表現

されている。「幸福」は「夢」という非現実なものによる現実の状況の不可解な転換を描いている。「夫婦」は、淫奔な妻と貞淑な娼婦と気が弱い男の「不可解」な恋愛譚が描かれている。「鶏」は南洋の一人の「不可解さ」に悩む「私」が描かれている。このように「不可解さ」は「古譚」の風格を受け継いでいると言える。

さらに、「南島譚」には、ほかの作品にない多くの誇張表現、多彩な比喩などがみられる。このような表現は中島の作品の中では珍しく、彼のよく知られた作品の持つ漢文調の文と比較すると、その違いがはつきり分かるであろう。誇張表現と比喩の大量使用の結果、「南島譚」の独特なユーモアが生じた。そして、このユーモアによって、一層、「南島譚」の「不可解さ」を引き立てる効果が得られた。

### 終わりに

以上の分析を通じて、大きく分けて、南洋物はおもに三つの特徴があると考えられる。一つ目は、作品「マリヤン」に代表される植民地と植民地の人間に注目したことである。少年時代の植民地体験を生かした習作「巡查の居る風景」などの前期作品の性質に近い。二つ目は、作品「真昼」と「寂しい島」に代表される自己反省、存在への懐疑を描いたことである。これは「過去帳」の性質に近い。三つ目は「南島譚」に代表される南洋と南洋の人間の不可解さを強調したことであり、「古譚」の風格を受け継いでい

ると言える。つまり、南洋から帰国した中島は、作家になることを決意し、それまで、自分が歩んできた文学の道を振り返りながら、その思いを南洋ものに入れ込んだのではないであろうか。この意味では、南洋ものは、中島のそれまでの作品の集大成ともいえよう。南洋ものの創作を通じて、過去を振り向き、そして、新しい文学の道に踏み出そうとしたのではないか。

尚、中島敦の引用テキストは筑摩書房版『中島敦全集』第一巻（二〇〇一年十月十日）、第二巻（二〇〇一年二月二十日）、第三巻（二〇〇二年二月二十日）に拠った。内容に影響を及ぼさないルビ、傍点は省略した。

### 注

- (1) 一九四二年十一月、作品集『南島譚』に収録され、今日の問題社から刊行。
- (2) 『中島敦全集』以下省略して、『全集』とする。第三巻 六六八頁。
- (3) 昭和十六年十二月二十一日日記 『中島敦全集』第三巻 四八八頁。
- (4) 昭和十六年二月三十一日日記 『中島敦全集』第三巻 四八九頁。
- (5) 岡谷公二 『南海漂泊 土方久功伝』 河出書房新社 一九九〇年八月。
- (6) 『全集』第一巻 四〇五頁。
- (7) 『全集』第一巻 二八五頁。
- (8) 『全集』第一巻 二八三頁。
- (9) 松下博文 『中島敦・マリヤン』考 越境する日の丸(その一) 『叙説』十四 叙説社 一九九七年一月。
- (10) 『全集』第一巻 二九七頁。
- (11) 昭和十六年十一月六日付 中島田人宛書簡 『中島敦全集』第三

- 卷六二七頁。
- (12) 昭和十六年十一月九日付 中島たか宛書簡 『中島敦全集』 第三卷六三一頁。
- (13) 川村湊 『南洋・樺太の日本文学』 筑摩書房 一九九四年十二月。
- (14) 佐々木充は中島敦の南洋行について、「南洋こそ、文明世界が失いつくした始原の世界を今なお保有しているという認識、今や一つの異世界になってしまっている我々の魂の故郷であるという認識が中島にあり、中島の南洋行は遙かな国・遠い昔への思い、異世界への憧憬という形をとった、基本的な人間存在の認識への希いだっただ」と述べている。「中島敦 南島譚 について」『帯広大谷短期大学紀要』一九七〇年三月。
- (15) 『Spirit 中島敦《作家と作品》』 有精堂 一九八四年七月。
- (16) 『全集』 第一卷 一〇七頁。
- (17) 『全集』 第三卷 六〇七頁。
- (18) 島尾敏雄 「中島と南島」 『中島敦全集』 別巻 七二頁 筑摩書房 二〇〇二年五月。
- (19) 濱川勝彦 『中島敦の作品研究』 明治書院 一九七六年九月。
- (20) 『全集』 第一卷 二七八頁 文中の「laner」は全集の印刷ミスだと思われる。正しい書き方は「laner」である。
- (21) 『全集』 第一卷 四一一頁。
- (22) 昭和十六年九月十七日付 中島たか宛書簡 『中島敦全集』 第三卷五八七頁。
- (23) 昭和十六年十一月九日付 中島たか宛書簡 『中島敦全集』 第三卷六三二頁。
- (24) 『全集』 第一卷 二五九頁。
- (25) 同注19。
- (26) 『全集』 第一卷 二二二頁。
- (27) 同上 二二四頁。
- (28) 『全集』 第一卷 二三八頁。
- (29) 土方久功 「青蜥蜴の夢」 『土方久功著作集・第六卷』 所収 三一書房 一九九一年。
- (30) 『全集』 第一卷 二四二頁。
- (31) 『全集』 第一卷 二五一頁。
- (32) 『全集』 第一卷 二四二頁。

主指導教員（佐々木充教授）、副指導教員（高木裕教授・井村哲郎教授）